
メガネと天狗の山

五目御飯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メガネと天狗の山

【Nコード】

N4939Z

【作者名】

五目御飯

【あらすじ】

地に足が届かない女子中学生と、空気的存在感を誇る天狗が、同棲しているらしい。彼らの日常を観察・記録をするため、筆者は立ち上がった。得た情報は適宜読者の皆様にお知らせするとともに、彼らの生態系を詳細に研究していく所存である。どうにもつまらない結末になりそうであるが、少しでも興味を持った同人は付き合ってほしい。今――筆者の冒険が始まる。

イ（前書き）

筆者は決意したのだ。タイムマシンに乗り、天狗が現れた時代へ旅立った。空に閃光が！「ドーン」という音に驚きを隠しきれないまま、筆者は口を開いたまま、呆然と空を眺めていた。天狗である。本物だ。誰か偉人が亡くなったのか、天変地異の前触れか、幼児が病気なのか、おめでたなのか。筆者は天狗に駆け寄った。倒れる天狗。危険を顧みず、それに近づく筆者。天狗からは煙があがっている。「大丈夫か」「大丈夫だ、問題ない」。ブイサインを返す天狗。苛立ったので、取り敢えず蹴っておく。それから、その天狗の姿を見かけたのは、ある山中を歩いていたときであつた。これは…跟けるしかない！

イ

ナキは非常に困っていた。
人の子が懷いてしまった。
人の子はナキに抱きつき、こう言うのだ。

「うちな、ナキのお嫁さんなるわ」

ナキは非常に困った。
なぜなら、彼は天狗だから。

彼は、一刻ほど前である。
ナキは山中を散歩していた。
久々の外出であった。
冬の風が頬に当たる。冷える身体を包むように、ナキは両二の腕を持つ。

本当は、祠の奥で休んでいたかった。
しかし、そもいかない、用事ができてしまったのだ。
人間様に呼ばれてしまった。

山神たるもの、人がいてこそ存在できる身。
お呼ばれされたからには、行かねばならぬ。
“山神”と言ったものの、天狗という存在は、まあ不思議なものである。

神という人間もいれば、物の怪と呼び、避ける人間もいる。
善か悪かといわれると、どうにも首を傾げる存在。

生き物であるかも定かではない。
ただ、腹は減るらしい。

さて、話は戻る。

自分の名を呼ぶ人間の様子を見に、祠を出た。
どうやら、自分の名を呼んだのは童子らしい。

童子は社の前で泣いていた。

華奢な身体は、ちゃんと仕事ができるのかと尋ねたいほどである。
華奢というより、痩せ細った、と表現した方が正しいかもしれない。
い。

「おれを呼んだのはお前か」

上から目線の、低い声。見下した目は童子を睨み付けているようである。

別に、そういうつもりはないのだが。

「ああ、来てくださった。うれしゅうございます、ナキさま」

「用件を述べよ。おれは頗る眠い」

ナキの登場に感動していた童子は、心底驚いていた。
天狗も寝るのだ。

「迷子になってしまいました」

なんとということか。

迷子になったからと、呼び出されてしまった。

さっさと童子を人里に帰し、自分も帰宅して飯食って寝よう。ナキは今後の予定を組んだ。

「お前の里はいずこに」

問うと、童子は谷を指して「あの辺りです」と言った。
苦手な里であった。

あそこの住人は、どうも気性が荒い。
空腹に耐えかね、里に下りると、彼らは石を投げてきた。
飢饉であったこともあるだろうが、そこまで露骨に追い出そうとしなくても。

ナキは以降、あの里に下りることを避けている。
まさか、このような形で再度訪れることがあるうとは。

「よろしい。目を瞑りなさい」

童子が目を瞑ったことを確認。

ナキは童子を抱え、里まで飛んだ。

久々に飛ぶと、気持ちのいいものである。

引き籠り生活が長すぎたようだ。

食料は山の動物が持ってきてくれるため、生きるに困らない。
墮落した生活を送っていた。

ナキは童子を里の入り口で降ろした。

目を開けるよう言うと、童子は素早く、目を全開させた。

大きな目がこちらを見つめている。

ナキはたじろぎ、目を逸らす。

視線は止まない。

「なんだ」

我慢できず、こちらから声を掛けた。
すると、童子は言ったのだ。

「うちな、ナキのお嫁さんなるわ！」

どういうことだろう。

厄日なのか。今まで堕ちた生活を送っていたことに、天災がやってきたのか。

天狗そのものが天災であるはずなのに、どういうことだろう。

この里の人間は、どうもこの天狗を困らせてくれるらしい。

敬語もどこかへ行ってしまった。

「ああ、その。反応に困るから、そういうことは」

「天狗様がうちに来られたら、母上もお喜びになる！」

童子と思っていた人の子は、どうやら女であったことが今更発覚した。

さておき、事情が呑み込めない。

「どういうことだ」

「天狗様が家にいると、その家は裕福になるのです。昔からの言い伝えです」

座敷童かなにかと勘違いをしているのではないだろうか。

だが、座敷童は家の守り神であり、裕福にする神というわけではない。

この里だけに伝わる話だろうか。

そんなことはどうでもいいのである。

ナキはそろそろ、空腹と眠気のダブルアタックに倒れそうなのだ。
帰ってもよいだろうか。

「うちの家は貧乏でな、畑はよう荒らされる、男手はおらん、女兄弟ばっか。母上も床に伏せ……」

彼女は顔を伏せ、鼻をすすりはじめた。
泣いている。

女の泣き声は苦手である。

ナキは彼女の頭の上に、手を乗せた。
すると、瞬時に彼女の手がナキの手首を掴んだ。
油断していたこともあり、引つ込める暇もなかった。

「というわけで、どうかナキ様、天狗様。うちの家に来てくれん？」

嘘泣きであつたらしい。

大体の人間は、泣けば顔が赤くなるものだが、この娘の顔は先程と変わっていない。

元気で、明るい笑顔が、こちらを見つめている。

とはいえ、言っていたことは事実らしく、やせ細った手足は、見ていて折れそうで怖い。

なんとかしてやりたいと、ナキの良心は訴えている。
だが、こちら也非常事態なのだ。

「すまない」

ナキは、彼女の顔を見ずに、小声で言った。
謝罪の言葉は、彼女に届いていたのだろうか。

確認する余裕もない。

ナキは、人の子を置いて、山へ帰った。
また、飯食つて寝たら、来るから。

なんて、自分勝手なことを発言することはなかった。「また来る」

とも言えなかった。

言えば良かった、と後悔したのは、祠で遅めの朝食を摂っていた時であった。

口（前書き）

現代日本に帰ってきた。時は2011年12月。冬至も近づくある日のことである。ある女子中学生を見つけた筆者は、彼女を追尾せざるを得なかった。眼鏡をかけ、髪を二つ括りにした美少女であつたからだ。これは追尾せざるを得ない。セーラー服が良く似合つてらつしやる。いい匂いがしそうであるが、近づく勇氣は無い。すると、まさかの目標確認。筆者が追っている例の天狗の登場である。美少女戦士の前に黒いタキシードを着たイケメンが、などという展開ではない。寧ろ、筆者としては悪役がやってきた気分である。「ろっとお、驚かせてしまったな」「これは何だ」「それは昨日言つただろう」。

□

華子は咄嗟に耳を塞いだ。

突然の爆音である。

同時に、空中で何かが爆ぜた後があった。

青い光の線が、重力に引かれるように地へ向かっている。

「うわ…花火かな」

華子は訝し気にその空を見ていた。

周りの人も華子と同じ方角を見ている。

自分だけが見た、錯覚というわけではないようだ。

新聞の夕刊を見れば正体はわかるだろう。

それだけでなく、インターネットを使えば、あれが何であるか分かる。

便利な世の中になったものだ。

津久井華子。中学生である。地元の公立中学に通う、帰宅部の少女だ。

容姿のせいか、「頭が良さそう」だと言われることが多い。

実際は、通知簿が家にやってくるたびに、親が冷や汗をかくほどの成績である。

第一印象が「頭が良さそう」であれば、得をすればする。

たとえば、試験の面接などがそうだろう。

ただ、長く付き合うだろう相手に「頭が良さそう」などと言われた日には、華子は困ってしまう。

相手の期待を裏切る真似などしたくない。

とはいえ、勉強なんてやってられない。

少し、不良っぽく装ってみようか、などと考えた。

それは親の期待を裏切ることになる。

華子は溜息を吐いた。

放課後である。

帰宅したところで、華子がすることは、自分の夕飯作り。洗濯物も取り込まなければならない。

その前に夕飯の材料は家にあっただろうか。

華子は「家に帰りたくない」の一心で神社に足を向けた。中学生になってから、学校のある日はいつも通っている。どうせ、帰ったところで両親はいないのだ。

両親は各々別の地へ単身赴任中だ。

と言えば、華子の両親に非難の声が行きそうである。

彼女の両親は悪くない。

なぜなら、彼女の両親は別に単身赴任をしているわけではないのである。

華子の両親は自宅から職場へ通勤している。

二人とも朝早く出かけ、夜遅くに帰宅するため、自分の身の回りのことは自分でしなければならぬ。

物に不自由をしないところは、一人暮らしと異なる点だろう。

そんな前振りの話はどうでもよい。

華子は神社のお宮の前にある階段に座った。

缶コーヒーのタブを立て、元に戻す。

そして、口に運ぶ。

二、三口飲み「あゝ、あゝー」とかオジサンのような声を出す。

これが彼女の日課である。

恋する年頃になれば、オジサンのような声を出すことはなくなるだろう。

だが、しばらくこの日課は続く。

両親が仕事を辞めることはきつとないし、引越す予定もないのだから。

「暇だー」

華子は缶コーヒーを脇に置き、階段に座ったまま背伸びをした。両腕を上げ、思い切り伸びる。勢いで目を瞑る。

気持ちがいい。

一日の癒しタイムである。

瞑っていた目を、徐に開く。

「うわああああ!!」

華子は声を上げて階段から離れた。そんな。

立ち上がれ切れてない体勢のまま、気合で移動したため、勢いで尻もちをついた。まさか。

見間違えかと、目を擦るが、それは、そこにいる。

「は、羽」

声が裏返っている。

そんなことを気にしている場合ではない。

目の前には、ひょっとこの仮面を着けた人がいた。その背には羽がある。黒い、鳥の羽のようだ。

「そう逃げないでくれよ」

目を開けると、眼前にひよつとこの仮面。驚かざるを得ない。逃げざるを得ない。

まじまじと、ひよつとこを見る。全身を見る。

ひよつとこの仮面を着用しているという点と背中黒い羽以外、異常な個所はない。

いや、十分異常か。

それらを除けば、自分の父親に似た、細身の成人男性。といった感じの印象である。

「恥ずかしいから、あまり見ないで」

なんだ、こいつは。

声の低さから、男性だと窺えるのだが、なんだろうこの気持ち。

「きもい」

そうだ。気持ちが悪い。「きもい」と略したニュアンスの方が近い。

声に出して分かる、自分の気持ち。

「酷い」

ひよつとこは、両手で拳を作り、合わせた。それを自分の顎のあたりに寄せる。

わあ、気持ち悪い。

「いやあ、久々に空飛んでたら、制御利なくなっちゃって」

ひよつとこは後頭部を掻く真似をする。

華子に近づき、左手を出してきた。華子は思わず、自分の左手でその手を持った。

強い力で引つ張られ、立ち上がる。

大きい。華子の感想である。

ひよつとこは仮面を着けているため、どんな顔をしているのか分からない。

「空、飛んでたって」

華子は訊ねた。気になる単語である。

飛行機が墜落したのだろうか。それでこの雰囲気。ありえない。

別の可能性を考える。

先程の爆音を思い出す。

いや、違うだろう。

考えを巡らせる。

それに終止符を打ったのは、ひよつとこからの告白であった。

「おれ天狗なんだけどね。しばらく引き籠ってて、空の飛び方忘れちゃったの」

ひよつとこはおどけてみせる。

仮面に右手を掛け、左手で耳に掛けていたゴムを外す。

まさかの「おれ天狗」発言に呆然とする華子。

さらに露わになった天狗の素顔に、華子は声が出なかった。

八（前書き）

筆者は今日も地をかけてる。牛井が食べたい盛りではあるが、松竹梅のどれが一番小さいサイズなのかよくわからず、とりあえず一番安いを選んでいいことに気付いた。天狗の背中から黒い羽を生やしたすがたは、まるで鳥が人になるうとして失敗したかのようである。無駄にイケメンである。イケメンとかリア充とか、見ていると苛々してくるからさっさと爆発してしまえばいいのに。クリスマス中止のお知らせはまだ彼らの元には届かない。「気の毒に。墮天した時に声を失ったんだな」。

八

引き籠り生活約四百年。

情報は表の動物から仕入れていたが、予想外の景色に、ナキは絶句した。

いつかに人の子を送った里は、枯れている。

山の、里跡と反対側の平地を見ると、四角い建物が多く並んでいた。

空気が汚い。

空腹に腹を抱えつつ、取り敢えず世の中を見に行くことにする。

空を飛ばうと、背の翼を広げる。

抜け毛ならぬ抜け羽が酷い。

飛べるだろうか。

ナキは少々不安になりながら、羽を動かした。

身体が浮いた。とりあえず安心するが、正直羽があってもなくても飛べるのは内緒だ。

そのまま、街の上空へ移動。

それにしても、カラフルな世の中になったものだ。

読めない文字がかかれた看板には、気持ち悪いくらい肌の白い女の姿がある。

「うわ、マジキチ」

ナキは、街中に降りようと試みた。

しかし、どうも降下の仕方が分からない。

制御不能になり、そのまま墜落。

運よく、墜落先は人気のない神社であったため、休憩をすることにした。

「それで、ここにいます」

「そういうこと」

「現実味が無いにもほどがあるな」

華子は缶コーヒーを飲む。

ひよつとこの仮面を外した男、ならぬ、天狗は、予想以上に綺麗で端正な顔立ちをしていた。

顔のパーツが見事なバランスをとって並んでいる。

華子は顔を合わせるのが辛く、鳥居を見つめている。

天狗の名前はナキというらしい。

ナキは自分の過去の話を大雑把にした。

それ以前に、天狗とは何なのかについて教えて欲しい。

「もったかつこいい登場をしたかったよ」

「へえ」

具体的にはどのようなだろうか。

空中で10回転して華麗な着地。

派手なステージで歌って踊って。それも、下から上がってくるステージ。

「あの時の人の子には、ちよつとかつこいい言葉で喋って、天狗のイメージアップに成功したんだ」

本当に成功していたのだろうか。
かっこいい言葉で喋ったところで、イメージが良くなるとは限らないのではないか。

そんな疑問は喉の奥にしまう。

「華子さん。お願いがある」

ナキは顔の前で両掌を合わせる。

勢いよく合わされたため、音が鳴った。

「食物を恵んでほしい」

華子の財布の中には500円玉が一枚、夕飯の材料代にあるだけである。

ナキに奢るのであれば、自分は夕食抜き覚悟をしなければなら
ない。

どうしたものか。

華子が財布とお腹の中と相談をしていると、ナキが口を開いた。

「巳年生まれの牛を一頭くれたら十分なんだ」

「殴るぞ」

「何故!？」

天狗というのは肉食なのか。巳年生まれ限定なのか。

華子が、思わぬ事態に思考を巡らせていると、この天狗は信じられない一言を放った。

「そうか、お前馬鹿か」

「失礼な。何を根拠に」

「常識だろ。餓鬼に出会ったら自分の干支と同じ午を捧げる。常識だよ」

「常識だ」。二回もいい、強調してきた。

華子は少々苛立った。そして、ある疑問が浮かぶ。

「なんで私の干支を」

「そういうのは、わかる子なのよ。本当に知らない見たいだね。外見からすでに阿呆そうだしな」
「ほっとけ」

華子は深くため息を吐いた。
なぜ神社に来てしまったのだろうか。
後悔はそこから始まる。

日課だったから。言えば、悪いのは華子ではない。ナキにある。
苛々していると、ふと、天狗の言葉が脳内で再生された。

「外見からすでに阿呆そう」。

初めての意見である。

華子はその一言に、ひどく感動した。

牛一頭は不可能だが、牛井一杯なら奢れる気がしてきた。

「牛井でもええ？」

「牛井？ まあいいや」

初めて聞く料理名に、ナキは首を傾げた。

天狗はその辺りに蔓延る餓鬼とは桁が違う。天狗というのは誇り高く、心が広い。

と、自分で自分に幻想を抱いてみる。

正直、食べられたらなんでもよいのである。

ナキは、財布の中身を確認する華子を凝視した。

次にどのような行動を起こすのか。
見ていると、華子の手が止まった。

「どうした」

この天狗の姿、他の人には見えるのだろうか。
今更であるが、大事な問いである。

もし華子にしか見えないのであれば、外食はまずい。
見えていても、羽や服装が目立ってしまい、よろしくない。
訊くべきか。

また馬鹿にされるのがオチなのだろうが、本人に尋ねることしか
彼女の疑問を解消する術はない。

「天狗って、他の人にも見えるん」

「さあ」

適当な返事である。

興味もなさそうである。

「よし、わかった。今から牛丼買ってくるから、ここで待って」

一番無難な選択である。

持ち帰りができる牛丼を買えばよいのだ。

人目も気にせずに済む。

ナキに提案をした華子は、彼の返事を待たぬまま、財布を鞆にし
まった。

「それは困るよ。お前が戻ってこなかったらどうするんだ。空腹の
あまり、おれは自分の山に帰ることもできないんだよ」

「背中から羽を生やした野郎と一緒に買い物なんかしたくない」

華子が言うと、ナキは「ああ」と何か納得したような声を出した。ナキは両掌を勢いよく合わせた。音が響いた。先ほど両掌を合わせたときとは違う音である。音がした、というより、響いたという表現が適切である。ナキの背にあつた翼が、みるみる透けてゆく。初めて見る光景で、気味の悪い光景であつた。完全に見えなくなった羽。翼が生えはじめはどのようなになっているのかと、ナキの背中を見た。

「服に穴が空いてない」

無意識に呟いた。

そもそも、羽が見えていたとき、ナキの服はどのようなになっていたのだろうか。

いったいどのような仕組みなのか。

夢でも見ているのではないか。

華子は右頬を抓った。痛い。確認してすぐに離しても、まだ痛みがあつた。

「ね、大丈夫でしょ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4939z/>

メガネと天狗の山

2011年12月19日14時51分発行